

第一学年

単元名「あきとなかよし～みんなあつまれ！『あきまつり』がはじまるよ～」

豊川市立赤坂小学校 鈴木 志歩

1 単元について

(1) 単元設定の理由

本学級の子どもたちは、外遊びが好きで、季節感を楽しむことができる感受性豊かな子どもたちである。9月に入り、周りの木々の色づきや落下した木の実、トンボやバッタの出現など、少しずつ季節が夏から秋へと変化していることに気づき始めた。休み時間によく外で遊ぶ子どもたちは、虫取りをしたり、ドングリや落ち葉を拾ったりして自ら遊びに取り入れていた。また、学校だけでなく、通学路や家庭、自分の身の回りで見つけた秋を報告してくれるようになった。

『小学校学習指導要領（平成29年告示）解説～生活編～』では、「他教科との関連を意識し、これまで例示されてきた国語科、音楽科、図画工作科はもちろんのこと、低学年の全ての教科等と生活科との関連を図り、指導の効果を高めていくこと」「生活科における学習活動が他教科等での題材となったり、生活科で身に付けた資質・能力を他の教科等で発揮したり、他教科等で身に付けた資質・能力が生活科において発揮されたりして確かに育成されるなど、より一層の効果が期待できる」（p58）と記されており、他教科との関連を積極的に図り、低学年教育を充実させることが求められている。

そこで、他教科との関連を積極的に図ることで、子どもたちの気付きの質の高まりや、子ども同士または子ども対他者との関わりが深まることを期待した。また、秋の魅力を体や心で十分に感じながら自分の思いや願いを実現させる経験を積んでいくことで子どもたちは、自分と友達とのつながりを大切にしながら、自ら遊びを創り出し、毎日の生活に季節を取り入れながら豊かに生活していくことができると願い、本研究に取り組むことにした。

(2) めざす子どもの姿

- ・秋の自然に親しみ、思いや願いを広げる子
- ・秋と関わる活動を通し、仲間と共に学ぶ楽しさや自分の成長を感じ取る子

(3) 仮説と手立て

仮説Ⅰ

自然の変化を捉えながら楽しむことができる活動を学習活動全体を通して展開すれば、自然を活かし、「何か作ってみたい」「遊んでみたい」という思いや願いをもち、それを広げていくことができるだろう。

手立てⅠ

- Ⅰ―① 『掲示板』、『絵本』、『折り紙』の教室環境を活かし、身近な秋に気づかせる。
- Ⅰ―② 他教科との関連を図り、合科的・関連的に単元構想を組む。

仮説Ⅱ

秋の魅力を身近な人たちに伝える『秋まつり』をゴールとし、関わる場や振り返る場を設定することで、仲間と関わりながら活動する楽しさや自分の成長を感じ取ることができるだろう。

手立てⅡ

- Ⅱ―① 友達や他学年、先生との関わりの中で、秋に対する願いを広げ、深める。
- Ⅱ―② 『お助けベル』を使用し、困ったときにすぐに友達に聞いたり、自分が考えたものを友達に紹介したり、広げたりする場を作る。
- Ⅱ―③ 『秋の宝物地図』の変化を通して、できるようになったことに気づかせる。

(4) 単元構想 (全21時間完了)

- 【手立て1-1②】
- ◆他教科との関連
 - ◆国工「『あき』といえは？」①
 - ・「秋」と聞いて思いつくもの、こと、感情、様子などを絵や言葉で表す。
 - ◆国語「なにに見えるかな」
 - ・見つけたものを並べて、何に見えるかを紹介する。
 - ・互いの話に関心をもち、相手の発言を受けて楽しく話を聞く。
 - ◆国語「はっけんしたよ」
 - ・観察した動植物の様子を伝えるために必要な事柄を集め、伝えたい事を明確にして書く。
 - ◆算数「3つのかずのけいざん」「たしざん」②
 - ・秋に関わる問題を解いたり、問題作りを挑戦したりする。
 - ◆国工・生活科「秋のリース作り」
 - ・アサガオのつるでリースを作る。
 - ◆国工「すてきなぼろし」
 - ・ハロウィンに向けて、季節に合った飾りつけをして楽しむ。
 - ◆算数「ひきざん」②
 - ・秋に関わる問題を解いたり、問題作りを挑戦したりする。
 - ◆行事・社会見学「豊橋動物園に行く」
 - ・いろいろな動物と触れ合い、動物に親しみをもち、マナーを守って集団行動ができるようになる。
 - ◆道徳「ありがたうがいっぱい」
 - ・学校や家庭、地域でお世話になっている人に感謝の気持ちをもつ。
 - ◆道徳「おふろそじ」
 - ・自分のやるべき勉強や仕事をしっかりと行おうとする心身を育てる。
 - ◆国工「あき」といえは？」②
 - ・単元で学習したことや経験を活かし、初めの絵図に付け足す。

秋、みいつけた！ ⑥ 【見つける】

「あき」といえは？

- 「あき」という言葉から思いつくものをかく。(後の「秋の宝物地図」)
- ・ドングリ ・あかいのはっぱ ・まつぼっくり
- ・すずしい ・はっぱがカサカサ ・ドングリごま
- ・パッタ ・コオロギ ・トンボ

学校にある「秋」を探しに行こう！ 「くらしの中にある「秋」【家庭、通学路】

○秋探しに行く。

- ・ドングリがたくさん落ちていてね。
- ・葉っぱが赤や黄色くなっているよ。きれいだね。
- ・葉っぱを踏むと、カサカサ音が鳴るよ。おもしろいね。

秋をたくさん見つけたよ。見つけたもので遊んでみよう。

○見つけたもので遊ぶ。

- ・葉っぱに穴が開いているよ。お面みたいでおもしろいね。
- ・ドングリでコマが作れそうだよ。競争したいな。
- ・ドングリや葉っぱを並べると何かに見えてきたよ。

みんなが作ったもので、「秋まつり」を開こうよ！

思いっきり楽しもう！「秋っておもしろい」 ⑨ 【楽しむ】

どんなお祭りにしようかな。

○秋祭りの計画を立てる。

- ・私は、ドングリを使ったおもちゃ屋さんを開きたいな。
- ・私は、来てくれたお客さんに、落ち葉のプレゼントをするよ。
- ・みんなが楽しめるお祭りにしたいね。

友達と協力して、すてきなお店にするぞ。

○それぞれのグループに分かれ、秋祭りの準備をする。

- ・遊びのルールは、何にしようかな。
- ・看板も作らなきゃね。
- ・遊んでくれた子には、何かプレゼントしようかな。

もう一度、やってみよう！

○各グループの課題を取り上げ、解決策を話し合う

- ・ここが上手くいかないんだけど。
- ・○○さんの意見を試してみようよ。
- ・ルールはこれでもいいかなあ？
- ・アドバイスしてもらって、よかつたな。

「あきまつり」、楽しみだな。お店屋さんとしても頑張るぞ！

○「あきまつり」を開く。

- ・やっぱり、みんなで遊ぶと楽しいな。
- ・お客さんが喜んでくれて嬉しかったな。

もっと、みんなに教えてあげたい！ 秋って、楽しいよ。

みんな、集まれ！「あきまつり」が始まるよ ⑥ 【伝える】

2年生を「あきまつり」に誘っちゃおう！

○2年生を招待する計画を立てる。

- ・遠足でお世話してくれてありがたうの気持ちを伝えたいね。
- ・ルールは変えた方がいいかなあ。少し難しくしてみようかな。
- ・もっと、材料を集めてこなきゃね。

○2年生との「あきまつり」の準備をする。

- ・2年生、喜んでくれるといいね。
- ・もっと仲良しになれたらいいな。

○2年生を招待する。

- ・2年生と一緒に遊んだら、もっと楽しかったよ。
- ・「楽しいね」「すていね」って言ってもらえて、嬉しかったよ。
- ・頑張って準備して、良かったな。

2年生に喜んでもらえて嬉しかったよ。

○秋の宝物地図を完成させる。

- ・前よりもっと、たくさん書けそうだよ。
- ・どんぐりって、動物に変身したり、こまに変身したりして面白いわ。
- ・秋って、こんなに楽しいんだ。

秋の宝の地図が完成したよ。秋って、やっぱり楽しいね。

・自分のやりたいことを友達と協力しながら実現させようとする子

・諸感覚で秋のよさを感じ、自分の生活の中に取り入れて豊かにする子

- * 手立て② 評価
- * 子どもたちが「秋」をテーマに思いついた言葉、諸感覚をもとに、何をしてみたいか問いかけることで、主体的な活動を促す。(イメージマップ・夏にも実施)
- * ものだけでなく、音や涼しさなどにも注目させるために、声かけをしながら探索する。
- * 日常の中で見つけた秋を朝の会で取り上げたり、秋の掲示板として広げたりすることで、気付きを価値づける。
- * 秋で遊ぶ時間を十分に設け、秋遊びに浸らせる。
- * 夏から秋にかけての自然の変化や秋の特徴を見つけていたり、身近な人々と関わることの楽しさに気づいたりすることができたか。(知識・技能)
- * 子どもたちが主体的に選択できるように、たくさん意見を出させる。
- * 活動がおもちゃ作りに留まらないように、「秋が伝わるお祭り」をキーワードとして意識させる。
- * 相手意識をもたせるために、「自分たちが楽しい」とともに、「お客さんにも楽しんでもらえるようにすること」を考えて計画・準備をさせる。
- 【手立て2-1③】
- * 困ったときやみんなに見てほしいときに自由に集まれるように「おたすけペル」を活用し、自分たちで話しあったり解決したりする場を設ける。【手立て2-1②】
- * お店側とお客側がどちらも体験できるように、前半と後半を分けて行う。
- * 秋の自然と関わる活動を通して、楽しく遊んだり、友達や先生、2年生たちと遊んで関わったりしようとしているか。(主体的に学習に取り組む態度)
- * 2年生への感謝の気持ちをもたせるために、遠足や読み聞かせなど、2年生との関わりのある写真を提示する。
- * お店側として、2年生を楽しませることを目標にして取り組ませる。
- 【手立て2-1④】
- * 2年生にお礼の手紙を書いてもう一度、達成感を味わわせる。
- * 初めに行った「あきといえは？」の活動をもう一度行うことで、本単元での経験を振り返ったり、自分の成長を感じたりできるようにする。【手立て2-1③】
- * 秋の自然を使って、工夫して作品を作って楽しく遊んだり、周りの人たちが楽しめるように交流の仕方考えたりすることができたか。(思考・判断・表現)

(5) 抽出児童Aについて

A児は、保育園で経験したことをよく話し、国工や生活科などの学習に活かす姿が見られる。友達と関わり合いながら遊ぶことが好きだが、自分の思いを上手く伝えられず我慢してしまう姿も見られた。本単元では、秋の楽しさや不思議さに浸り、学校の中だけでなく、通学路や家庭などで見つけた秋をクラス全体に広め、A児らしく生き生きと学ぶ姿を期待する。また、自分の思いや願いを実現させるために、自ら発信し、友達と上手く関わり合いながら自信をもって活動できることを願う。

2 実践経過と考察

(1) 単元のスタートは、「赤とんぼ見つけたよ」

9月下旬、単元がスタートした。登校直後、ある子が「先生、昨日の帰りに、東山の坂のところで、赤とんぼがいっぱいいいてさあ、びっくりしちやったよ」と嬉しそうに話しに来た。この子どもの気付きを活かし、秋を見つけた第一号として、クラス全体へと広めた。すると、「私も、トンボ見えたよ。お母さんと一緒に手で捕まえたんだよ」「帰るとき、田んぼにお米があるのを見たよ」など、自分が見つけた秋を次々に教えてくれた。

その日から、毎朝登校すると、ドングリや栗、落ち葉など、様々なものを拾ってくるようになり、朝の会のときに、みんなに知らせるようにした。この、子どもたちが発見した秋の一つ一つをまとめて視覚的に共有できるようにしたのが『秋の掲示板』である(資料1)。顔写真や子どもが描いた絵、そのときの会話と一緒に廊下に掲示し、誰でもいつでも見られるようにした。



【資料1】秋の掲示板

A児は、日常の中での秋を見つけてきた。「お買い物に行ったら、お母さんがキノコを買っていたよ」「保育園のときに、毛糸でマフラーを編んだんだよ。もうそんな時期かな」と、嬉しそうに思い出しながら話をしていた。自分では発見できない子ども、その掲示板を見ることで「僕もこれ、知ってる」「私も、見たことある」というように発見した気持ちになれた。今まで無自覚だった秋の姿が、具体的に自覚されていった。日常の中で秋を見つけ、交流することのできる『秋の掲示板』の取り組みを単元を通して続けた。子どもたちが意欲的、主体的に秋を見つけるこの活動が秋の単元をスタートするきっかけとなった。(手立てI-①)

(2) 『秋』といえど?

単元の始めに、秋に対してどのような認識をもっているのか、一人一人がイメージマップにまとめた。この活動は、夏にも行っており、そこからは、個の経験が分かるとともに、かく様子から「やってみよう」「楽しみ」という思いを膨らませることもできる。今回も、真ん中に「あき」と書き、そこから秋に関するもの、音、色、感じることなど、様々な広げていった。



【資料2】A児の秋の認識(学習前)

A児の画用紙には、花や食べ物、虫など様々なジャンルのものの名前が書かれている(資料2)。経験豊かなA児らしい。一通り書き終わった後、これから、何をしたいか問いかけた。すると、「虫取りをしたい」「落ち葉で何かを作りたい」など、様々な意見が出てきたので、一つ一つ整理し、子どもの思いに沿って学習活動を進めた。A児も「ドングリ拾いがしたい」と発言し、他の子の意見に対して「それもいいね」と、わくわくしながら相槌を打っていた。

(3) もっと秋に浸らせるために ～秋の本、教室掲示～ (手立てI-①)

秋がいっぱいの校庭で、繰り返し秋見つけを行った子どもたち。授業の枠を超えて、もっと秋に浸らせたいと思い、教室環境の工夫をした。前述の『秋の掲示板』とともに、秋の本の掲示と秋の折り紙の掲示を行った。秋に関する本をさりげなく学級文庫に置いた(資料3)。子どもたちは、休み時間や給食を食べ終わった後の空き時間などに学級文庫を利用する。知識を身に付けるとともに、興味関心や「これをやってみたい」「見つけてみたい」などの思いをもたせ、授業に活かせるようにしたいと考えた。また、まず、教師が柿やコスモスなどを折り紙で作り、教室に貼った。する



【資料3】秋に関する本

と、「私も作りたい」という声が挙がり、図工の時間を活用し、みんなで作った。その後、A児が「もっと作りたい」と友達を誘い、休み時間にも作ったことで、だんだん秋がいっぱい素敵な教室になっていった(資料4)。自分の生活の中に秋が取り入れられることで、気分も上がり、学習意欲につながったと感じた。

(4) 秋と遊ぼう

ア 秋って楽しい

秋見つけの後、拾ってきた落ち葉や枝、ドングリなどを使って自由に遊ぶことにした。ドングリごまを作って遊ぶ子、お菓子の箱を組み合わせてドングリの家を作り、おままごとをする子もいた。

A児は、周りの様子を見ながら、きよろきよろしていた。なかなか自分のやりたいことが見つからなかったのである。

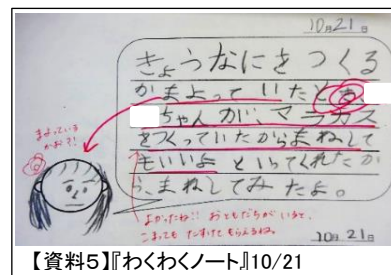
しばらくすると、友達がA児を誘ったようで、ドングリを紙コップに入れてマラカスを作って音を楽しむ姿が見られた。A児の振り返りからは、友達に誘ってもらえたこと、友達と一緒に活動できたことの喜びが伺えた(資料5)。何度か自由に秋遊びの時間を設定したが、A児は、自分から何か発想したり、「これがやりたい」という思いをもったりすることが苦手なようであった。友達に声を掛けるのも控えめで、どこことなく誘われるのを待っているような雰囲気があった。毎回の振り返りにも、「〇〇ちゃんのおもちゃをまねしてみたよ」という言葉を書くことが多くあった。しかし、それがA児なりの友達との関わり方であり、真似することで楽しさを味わっているように感じた。ある日の振り返りでは、「つぎはなにをしようかなとおもったら、ともだちのアイデアをやってみるよ」と書いた(資料6)。はじめは何をしたらよいか迷っていたA児が自分なりの方法で友達と一緒に楽しむことができるようになってきた。こうした変化には、A児を快く受け入れてくれる周りの友達の存在があることが分かる。

イ みんなで遊ぼう (手立てⅡ-①)

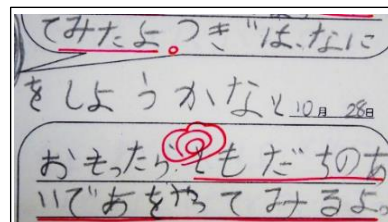
秋見つけと、それらを使った工作や遊びを何度か繰り返した子どもたちは振り返りに、「友達の作ったもので遊んでみたい」「自分が作ったものを友達に見てもらいたい」と書いた。そこで、その振り返りを全体で取り上げ、一度、みんなで遊び合う場を設けることにした。子どもたちは、互いが作ったもので遊ぶことを通して、自然と「こうやって遊ぶんだよ」と友達に説明する姿が見られた(資料7)。自分が作ったものを説明することで、自分の作品に対する思いが自覚化され、それを友達が遊んでくれることで喜びや自信につながる。さらに、友達が「すごいね」「おもしろいね」と肯定してくれることで、達成感や充実感を感じることができた。A児も、自分で作ったマラカスで楽しんでもらったことで、「次もマラカスを活かしたい」という思いをもつことができた(資料8)。子どもたちにとって、秋で遊ぶ楽しさと同時に友達と関わって遊ぶ楽しさ、活動の広がりも感じる場となった。



【資料4】『秋に囲まれて』



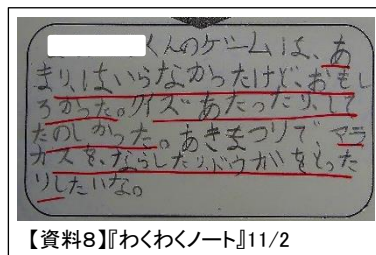
【資料5】『わくわくノート』10/21



【資料6】『わくわくノート』10/28



【資料7】みんなのおもちゃで遊びたい



【資料8】『わくわくノート』11/2

(5) 他教科との関連 (手立てⅠ—③)

ア 国語科「なにに見えるかな」

秋見つけに行った後、拾ってきた葉や実、枝などを並べてみた。「猫が作れた」「ヨットに見えるよ」など、想像力を働かせ、様々なものを作って楽しんだ。自然と、友達との会話が生まれ、「これなあに?」「これが、目で、これが耳」と会話を楽しむ姿が見られた。国語の学習では、「互いの話に関心を持ち、楽しく話をつなげる」という目標で、相手の言葉を繰り返したり、質問したりできることを目指す学習単元がある。ここで、会話を上手くつなげる言葉や方法を生活科で扱っている秋を題材に学ぶことで、さらに会話を楽しみながら自分の秋の作品を友達に伝えることができた。その後、朝のスピーチや授業の中での意見交流では、質問だけではなく、「いいですね」「私も好きです」「聞いて、びっくりしました」などの感想も言えるようになった。

イ 算数科「秋の問題づくり」

算数の学習では、引き算を学習している。教科書には、栗や柿など、秋の季節に合った具体物が出てくるのだが、それをより身近なものにするために、生活科とつなげた。子どもたちが行った秋見つけをもとに問題を



【資料9】問題づくり「はっぱが8まい、おちています」

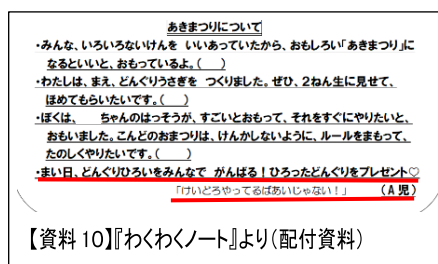
作り、提示したところ、とても反応がよく、楽しみながら式や答えを求めることができた。また、その後の問題作りでは、葉やドングリなど、秋を扱った問題を作る子が多くいた(資料9)。作った問題をペアで交流した際には、「ああ、ドングリ拾ったね」「この問題、いいね」など、嬉しそうに紹介し合う子どもたちの姿があった。

音楽の授業では、秋の歌を歌い、図工の授業では子どもたちが見つけてきたコスモスをクレヨンで描いた。こうした活動では、明らかに子どもたちの関心や意欲が高く、具体的なイメージを描きながら積極的に活動に取り組んでいた。

(6) 秋まつりへ ～計画・準備・実行～

ア 「秋まつりを開こうよ」 (手立てⅡ—②)

作ったおもちゃで遊び合い、十分満足した子どもたち。ゴールに設定した『秋まつり』に発展させるために、以前、A児が振り返りに書いていた「みんなで秋まつりをやりたい」という言葉を全体で紹介した。育ち始めたA児の積極性を後押ししたいという願いがあった。子どもたちの反応はとてもよく、「秋のものをプレゼントしたい」「ドングリをお金にしたら、どう?」「秋まつり音頭をつくって、歌って踊りたい」など、様々な意見が出てきた。『秋まつり』の一言で、自分たちで積極的に意見を出し合い、話し合いに発展する姿から、秋まつりへのわくわく感が伝わってきた。どんなお祭りにしたいか問いかけると、「秋でいっぱいのお祭りにしたい」「みんながうれしい、楽しいお祭りにしたい」という意見が出てきたので、こうした子どもたちの思いを今後のめあてとし、準備を進めることにした(資料10)。この話し合いの中で、A児は「ドングリをたくさん拾わないと。けいどろをしている場合じゃない」と発言した。いつも休み時間は、外で友達と鬼ごっこを楽しむこのA児の発言に、周りの友達は驚きながらも納得し、秋まつりに対するクラス全体の意欲が高まった瞬間だった。この秋まつりをきっかけに、A児が自分の思いをいろいろな場面で積極的に伝えるようになってきた。



【資料10】『わくわくノート』より(配付資料)

次時のはじめに話し合っで決めたのは、何の店にするかである。子どもたちは、意見を出し合い、その中から自分が一番やりたい店を選んだ。一番やりたいものに取り組んでほしかったので、人数に制限はかけなかった。多少、メンバーに偏りはあったが、困ったときは互いに助け合うことを期待し、様子を見ながら進めていくことにした。A児は、以前から作ったり遊んだりしていた「マラカスやさん」を選んだ。はじめは友達の真似をしていたA児だが、周りから認められたり、マラカスに面白さを見出したりし、自分自身で思いや願いをもって取り組もうとする姿があった。

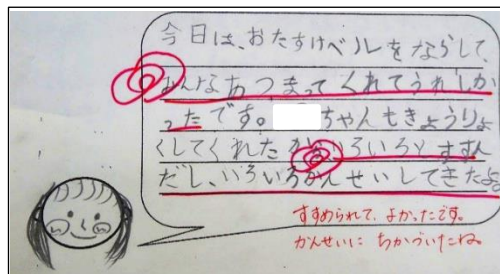
イ 『お助けベル』大活躍！ (手立てⅡ—③)

秋まつりの準備で活躍したのが『お助けベル』である。『お助けベル』とは、困ったことがあるときや、友達に聞いてほしいときに鳴らすためのベルであり、1学期から日常的に使っていた。今回の授業の中で、子どもたちがリアルタイムに自分の思考を働かせ、物事を解決していけるような手段として活かしたいと考えた。まず、使い方を確認してから、しばらくは、自分たちの準備に夢中になっていて、A児も含め、誰も鳴らさなかった。そこで、教師が困っていきそうなチームへ声を掛け、全体で共有した方がよいものは、「ベルを鳴らして、みんなに聞いてごらん」とアドバイスをし、ベルの活用を促した。ベルを鳴らすとみんなが集まって自分たちの話を聞いてくれる。いいアドバイスをもらえるとともに、自分たちの活動を認めてもらえるよさを子どもたち自身が実感し、『お助けベル』を活用し出した(資料11)。



【資料11】お助けベルの活用

A児は、看板づくりをしていた。このアイデアを全体へ広めたいと思い、A児にベルを鳴らして、みんなに教えるよう促した。すると、今度は自らベルを鳴らし、「私たちは(看板を見せながら)こんな看板を作りました。みんなも作った方がいいと思うので、作ってください」と友達に発信する姿が見られた。振り返りには、『お助けベル』によって、自分たちの活動が認められたことの嬉しさが書かれ(資料12)、自ら発信することへの喜びと自信につながった。



【資料12】「お助けベル、鳴らせたよ」

ウ 秋にこだわりをもつA児 (手立てⅠ—①)

ドングリでっぽうチームが『お助けベル』を鳴らした時のことである。「鉄砲を何で打つか」について話し合いが行われ、A児も発言した(資料13)。秋まつりのめあてにもある「秋がいっぱいのお祭り」を意識しているA児は、秋を取り入れた方がよいと発言している。この場だけでなく、どの話し合いの中でも「それって、秋?」「もっと、秋を入れたら?」と秋にこだわりをもって関わろうとしている姿が多く見られた。このA児の姿は、『秋の掲示板』で身近な秋に親しんだり、休み時間に何度も秋見つけに行ったり、秋の面白さに浸っている証拠だと分かる。また、「秋でいっぱいの秋まつり」にしたいというみんなの思いを実現したいという気持ちの表れでもある。A児は、はじめは紙コップにドングリを無造作に入れただけで満足していたが、学習を積み

【資料13】授業記録「秋いっぱいのお祭りに」

- C1: 木とゴムとどんぐりで打つか、ゴムだけで打つか、どっちがいいですか?
 C: 木
 C: ゴム
 C2: 木がいい人? (挙手)
 A児: だって、秋をいっぱい使ってるから。
 C3: ちょっと待って。理由理由! あのだ、お店だったら、二つやって、どっちがいいですかって聞くのはどうですか?
 C4: あ、ゴムだけでやると、なんかさあ……。
 A児: 秋がない?
 C4: 秋がないっていうかさあ、射的っぽくないっていうかさ、色が黒くない。だから、木の方が、Aちゃんが言ったように、秋も多くなるし、黒や茶色が出てくるから。
 C2: じゃあ、C3ちゃんが言ったとおりの、やり方にする? それとも、C4くんが言ったように、木の方を使うか、どっちがいい?
 C4: いいよ。
 C5: C3ちゃんと同じがいい。そのときに選びたい。
 C2: じゃあ、C3ちゃんの言う通りにして、どっちも使うから、どっちがいいって聞くのいい?
 C4: おっけー。
 C2: どっちがいいって聞くから、それで、こっちがいいって言って。
 C: はい。
 C1, C2: ありがとうございます。

重ねるごとにだんだんと秋を意識し始めた。プラコップを使って、中身が見えるようにしたり、ドングリの種類や大きさを分けて音を変えたり、ドングリだけでなく、枝や葉を入れたマラカスを作り、また違った音を楽しむようになった。

エ 私たちの『秋まつり』が始まるよ (手立てⅡ-②)

子どもたちがとても楽しみにしていた『秋まつり』を行った。前半と後半に分け、どの子もお店屋さんとお客さんの両方を楽しめるようにした。景品をもらって嬉しそうにしていたり、それぞれのおもちゃで楽しく遊んだり、とても盛り上がった。A児は、マラカスやさんとして、おすすめのマラカスを紹介したり、手作りの葉っぱのしおりをプレゼントしたり、いい表情を見せた。お客さんが来なくなったマラカスやさんのA児は、「マラカスやさん、今なら空いていますよ。来てください」と、大きな声でみんなに呼びかけ始めた。すると、他の子も影響を受け、それぞれの呼びかけの工夫が見られた。

その日の子どもたちの振り返りからは、秋まつりを十分に楽しめた様子が伺えた。A児の振り返りから、クラスのゴールとして『秋まつり』を設定し、子ども主体で秋まつりを創り上げていくことで、仲間と関わり合いながら活動を楽しんだことが分かる(資料14)。

(7) 2年生を『秋まつり』へご招待 (手立てⅡ-②)

秋まつりを計画した時から、「2年生にも見せたい、遊んでもらいたい」という意見が挙がっており、子どもたちの中でも、次は2年生という思いが既に強くあった。自分たちで秋まつりをやってみて、課題も見つかり、クラス全体で共有した。もっと来たくなる工夫をしたり、景品を作り直したり、回数や秒数などのルールを変えたりする店もあった。マラカスやさんのA児は、「次は、お客さんに付箋に感想を書いてもらう」と振り返りに書いた。他のチームが行っていた「感想カード」を参考にしたのだろう。

音を楽しむマラカスやさんは、お客さんが何を感じたかを捉えにくい。作品がどのように友達に評価されているのか付箋に書いてもらうことは、A児にとって、伝わったという実感を得ることであり、自信につながることになる。

一週間後の2年生との秋まつりに向けて「秋がいっぱい」「みんなが楽しい」という2つのめあてに追加して、「ありがとうの気持ちを伝えよう」と授業の中で話をした。A児の振り返りからは、マラカスや景品作りなど2年生を招く準備が整い、早く来てほしいという期待が強く表れている(資料15)。

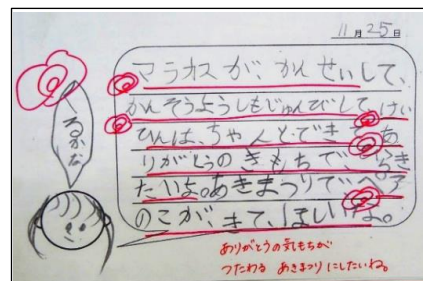
また、「感謝を伝える」という教師の思いを受け止め、さらに2年生をもてなしたいという思いを高めた。

いよいよ、2年生を招待する日が来た。事前にペアの子に招待状を渡しに行き、この日のために準備をしてきた。休み時間には、隣のクラスの子たちや先生方、5年生も遊びに来てくれて、ますます嬉しそうにお店屋さんとして接客していた。相手がいることで、その人を楽しませたい、喜ばせたいという思いが働いたのだろう。自然と、お客さんに対して「すごい」「おめでとう」「上手だね」などの言葉がけをすることができていた。

A児の振り返りからは、他者から褒められることで自分の今までの頑張りに気づき、成長した自分にも気づくことができた分かる(資料16)。お客さんに楽しんでもらえて嬉しいというのは、他者との関わりのよさを実感したから

【資料14】A児の振り返り

さいしょは、たのしんでくれるかドキドキしていたけど、みんながたのしんでくれてうれしかったよ。みんなのおみせにいてみると、たのしくって、おもしろくって、けいひんもあって、うれしかったよ。またいきたいとおもったよ。



【資料15】『わくわくノート』11/25

【資料16】A児「がんばってよかった」(『わくわくノート』より)

いっぱいおきやくさんがきて、たのしんでもらうのがたのしみで、まい日つくってきました。今日、じっさいにやって、みんながたのしんでくれたから、がんばってやって、よろこんでもらえて、うれしかったです。がんばってつくったのを5年生が「すごいね」「よくこんなのつくったね」とほめてくれました。みんな、先生も2年生もほめてくれました。それで、がんばれました。

こそ生まれた思いである。

(8) 秋、楽しかったね 『秋の宝物地図』 (手立てⅡ—④)

単元のまとめとして、『秋の宝物地図』を完成させることにした。単元のはじめに書いたイメージマップに、はじめと同じルールで付け足す時間を設けると、ほとんどの子が勢いよく書き始めた。赤単色の○で囲まれているのが単元終了後に追加した言葉である。A児の地図を見ると、虫探しや秋まつりの思い出など、単元内で経験したことが多く書かれている(資料17)。中には、「コスモス」から、「ずこう」に線が引かれている。これは、図工の時間に秋の花をテーマにコスモスを描いた経験からつながっている。また、ただ言葉が付け足されただけでなく、以前書いていた「ドングリ」から線が引かれ、「シイノミ」「小さい」「こうみんかんのちかく(拾った場所)」など、学習により得た知識が加えられている。A児は「こんなちょっとしか書いてないの?」と驚きながらも黙々とかき、「画用紙に入りきらないよ」と嬉しそうにしていた。『秋まつり』という言葉から自分の経験や学びをもとに、たくさんの言葉に広がっている。これらの記述は、A児の喜びと活動に対する自信の表れであり、それは、自分の成長を感じ取るA児自身の姿である。



【資料17】A児「秋がいっぱい、できたこといっぱい」

3 成果と課題

(1) 成果

他教科との関連では、秋と触れ合う時間を十分に確保することができ、幅広い分野で秋を感じさせることができた。生活科という枠を取り払うことで、どの教科でも子どもたちの普段の生活の中での経験が活き、意欲や主体性を高めることができた。

先生や2年生を招待することで相手意識が生まれ、相手を楽しませるという経験から、自分の活動が認められ、成長を感じることに繋がった。子どもたちの中で『秋まつり』というゴールが見えていることで、一つ一つの活動が意味をもち、友達と関わりながら見通しをもって取り組むことができた。個々に遊んでいたものがクラスで一つの『秋まつり』となることで、仲間同士の関わりが自然と生まれ、上手く折り合いをつけながら準備を進めていく「学び方」を学ぶことができた。

『お助けベル』を活用することで、各グループの活動を共有する場となり、クラス全体で秋まつりを創り上げているという思いをもたせることができた。また、周りに伝えたいことをリアルタイムで発信することができるため、秋まつりの準備の時間がより充実したものとなった。『秋の宝物地図(イメージマップ)』を単元の始めと終わりに書かせることで、自分の成長が目に見えて分かる。個々に学びの差はあるが、学習前の自分と学習後の自分を比べるので、どの子も成長を実感することができるため、有効な手段だと感じた。

(2) 課題

課題は、『お助けベル』の活用の仕方である。ベルを鳴らす時間を制限しないと話し合いが連続してしまい、各グループの活動が進まなくなってしまうことである。中には、自分のことに夢中になってなかなか集合できない子や、「今、やろうとしたところなのに…」という声も聞こえた。準備の時間を十分に確保した上でベルを活用することで、より有効的に働かざるを得ない。

(3) 研究主題に向けて

仲間同士での学び合いが、A児をはじめ子どもたち自身の思いや願いの実現、そして成長へとつながったと感じている。今後も、様々な教科を通して教材や仲間と深く関わり合いながら自分の成長を感じ、学びを日常生活に活かせる子どもを育てていきたい。